



小松昭夫（こまつ・あきお）

1944年島根県生まれ。73年、小松産業を創業。79年、小松電機産業（株）を設立。89年、協同組合テクノくにびきを設立。

ニュービジネス大賞受賞製品は  
シェア60%のトップブランド

神話の国・出雲の地にあって、  
シートシャッターの全国トップシェア（60%）を握る企業が小松電機産業である。

85年に開発したオリジナル商品の高速シートシャッター「門番」が、その優れた防塵、防風、防寒性から大ヒット。86年時点では4億4000万円だった売り上げが、90年には32億円に達した。

その業績が認められ、91年には「ニュービジネス大賞」を受賞。

続く92年には、地域に点在する

净水処理施設やポンプ場などを通じて、信ネットワークで結び、ホストコンピュータで一括管理するシステムの「やくも水神」を開発した。

同社を率いる小松昭夫社長の生家は宍道湖・中海のそば。子どもたちが湖に、近年、工場排水や生活排水が流れ込み、水質汚染がひどくなる一方だった。

宍道湖の水をもう一度、泳げるくらいにきれいにしたい、という小松社長の強い思いが「やくも水神」開発のきっかけだつた。その甲斐あって、この製品は、95年に科学技術庁の「注目発明選定証」を受証している。

宍道湖・中海の浄化は小松社長のライフワークだ。現在は、中海本庄工区の中央海域を海洋牧場にして栽培漁業を行い、周囲の一部を埋め立て、そこを有機農業の拠点にしようという事業計画を構想中である。

ZOOM UP

## 社会変革企業を自認する 小松電機産業株式会社

# 起業家フォーラム

内部組織として「H.N.S（人・自然・科学）研究所」の運営も行つて、いる小松さんの発想には、常に人と自然の共生があるのだ。

## 「何をやるべきか」の危機意識が人材を人財に変える

「常に危機意識が生まれるよう

が、小松社長の持論である。小

さな成功によつて大きな失敗を招

いてしまうことがベンチャー企業

ではよくある。小松さんは常にそ

れを戒める。

しかし、「門番」の大ヒットで、

小松電機そのものが地元のヒーローとなり、社員が浮き足立つて、

企業活力を失つたことがあつた。

そのときは小松さんは、慢心した社員を代理店に出向させ、販売の第一線に立たせて危機意識を奮い立たせたのだ。

また、若手だけの新商品開発チームを作らせ、「門番」のチームの安住意識を見事に打ち碎いた。

「門番」にしろ「やくも水神」にしろ、いわゆる市場創造型の商品である。新しいマーケットを切り拓いていく苦労は常について回る。「そこにこそ生きがいがあり、私

どもが生き残つていくだけではなく、一回しかない人生を共にする意義があるので

と、小松社長は言う。

「企業とはすなわち、社会適応業です。適応するためには、いつも危機意識をベースに置いた社会変

革業でなくてはいけない。人材をいかに「人財」に変えていくことでそれが可能になります」

「人財」とはいったい何なのだろうか。

「要は、各自が何を“やるべき”かを見極めること。決して“やりた

いこと”ではありません。前者は他人のため、後者は自分だけのための行為です。使命感と危機感の自覚さえあれば、逆にすべてが面白く、楽しく、愉快です」

## 人類究極の目的に向かつて行動を起こす時がやつて來た

「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」

これが小松社長の掲げる、創業8年目（1981）に定めた社是である。

1973年に弟と2人、10万円の資金でスタートしたちっぽけな会社が、ここまで大きくなつたの

も、常に喜びの輪を広げるものとして仕事に取り組み続けてきたからだ。

40代になつて、小松社長は

「中庸」という言葉を強く意識す

るようになった。

自分が置かれている環境をいつ

たん肯定し、人の縁によって現在の自分が、つまり生かされていることを自覚する。同時に、人類究極の目的に向かつて、状況に応じ「生かされながら生きる」。

これが小松社長の考える「中庸」である。

では、人類究極の目的とは何か。それは「天寿が全うでき、人々が楽しく愉快に生きられる、継続可能な社会の創造」であることを、小松社長は見いだした。

いまや人類は、科学技術の急速な進歩により、世界の枠組みを変えれば飢えと殺戮の恐怖から解放されることも夢ではなくなつてしまっている。

「20世紀は、人類究極の目的を追求できるインフラを整備するための基礎的技術力が確立された時代だった」と、小松社長は言う。今こそ目的を具現化するための目標を定め、行動を起こすべきときに

そのため小松社長は、事業で得た利益を投じて、「世界信頼、縁むすび大会」を開催。大会を通じ、立、前述した中海干陸事業の環境問題を解決する具体的な構想、

「人の縁と感謝・戦争の歴史記念館」と「未来を拓く研究所」の設立、

青少年の心の問題を解決するための松江市寺町再開発事業という3大プランを提言し、活動に入った。さらに、そのためのインフラ作りとして、島根県に2つある県立短期大学の再構築にも取りかかっている。これもまた時代への危機意識から生まれた、「今何をやるべきか」という問い合わせに対する、小松社長の答えなのだ。

97年12月に完成した新社屋は200名収容のホールを持つ



小松 昭夫氏

# 失敗しない未来を創造する方法を 善悪の対立概念を越えて歴史に学ぶ



97年6月、小松氏は韓国の独立記念館に日本人として初めて100万円を寄付。最初は受取りを拒否されたが、趣意書を送るなどして理解を得た

年間数万人の中・高校生が修学旅行で韓国に行き、独立記念館と戦争記念館を訪問しています。

そこでは日帝統治の頃、日本人が韓国人々を拷問にかけたり、虐殺したりする様が、電気仕掛けの蠅

人形やコンピュータグラフィックスで生々しく展示されています。

その展示を凝視し、どう受け止め

てよいかわからず、ショックを受けた子供たちが帰ってくる。その子供たちの気持ちを考えると、日本の将来が不安になつ

てきます。

独立記念館の

展示は、国の主権を他国に奪わ

れて多くの辛惨

をなめ、今日に至るまで、複雑

な半島情勢が続

く韓国人々の立場に立てば、

理解できること

であり、日本人としてこれをどう受け止めるかが、今、問われています。

それを、「いい

こともしてやったのに、そこまではやりすぎではないか」というような態度では、単なる居直りではないでしょうか。

また、過去についていつまでも言葉だけの謝罪を続けるの

も、問題の本質の解決にならず、愚かなことだと思います。

日本は、当時の世界情勢の中で韓国統治を国策として決定し、実行したわけですから、事実とその背景を探るなかで、どう受け止め、どう考えればよいのか、そして今、何を為すべきか。ここから出発すべきものと思います。

私は韓国の東宇技研株式会社の曹秀換社長と、シートシャッター「門番」で業務提携をし、何度も韓国を訪問しました。独立記念館も

数回訪問し、そのとき同館を見学した日本学生がショックを受けてい

るのを見たことがきっかけになり、『人の縁と感謝・戦争の歴史館』を作ろうと思い立ったのです。



(プロフィールは、p 30 の企業家フォーラムをご参照ください)

で、その「プロセス」の中から未来

が見えてくるのではないでしようか。

古来より現代に至る歴史の事実  
をさぐり、原因及びをその背景を一  
面的な善悪の判断を越えて研究し、

わかりやすく展示するのです。

さらに、「記念館」の中に“古き

をたずね、新しきを知る”「未来を  
拓く研究所」を併設することを考え

なく、そこで研究が行われているこ  
とに意味があります。

古来、縁むすびの地といわれ、韓  
国とも深い関係にあつた出雲からこ

通じてぎくしゃくした国際関係をも  
解決し、閉塞感の漂う世紀末に活

路を拓けることを確信するものです。  
の運動を起こすことで、戦前戦後を